

津田梅子の生き方（9） ～アリス・ベーコンの来日と梅子留学の希望～

華族女学校は、梅子が思い描いていた理想の女子教育の実践の場とはなりません。良妻賢母の育成を教育方針に掲げる華族女学校において、梅子が教える英語は重視されるような科目ではありませんでした。そして良家出身の生徒達は、伝統的な教養の外にある英語を学ぶことに対して積極性に欠けていました。アメリカのような自立した女性の育成を目指す梅子は、ここでも大きな落胆を感じるようになりました。

そんな華族女学校に勤務してしばらくすると、校長が英語のネイティブスピーカーを探しているという話が梅子の耳に入りました。梅子は、大山捨松のホストシスターであったアリス・ベーコンが適任であると考えました。

アリス・ベーコンは、捨松の世話を引き受けたレナード・ベーコンの末娘です。1858年2月16日、コネチカット州のニューヘーヴンで生まれたアリスは、梅子より6歳あまり年長です。彼女はヴァッサー大学出身で、捨松の同級生でもありました。華族女学校での教師としての招聘があった頃のアリスは、ヴァージニア州ハンプトン市の師範学校で教える教師でした。この師範学校は黒人やネイティブアメリカンなどを教育する特殊な学校として名を知られていました。

そんなアリスは姉妹のように育った捨松に再び会いたいという想いを抱いていたため、日本に来る機会があればと願っていたのです。当初は捨松がつくる学校を助けてアリスが来日する、という夢が捨松とアリスの2人



アリス・ベーコン

【提供】津田塾大学津田梅子資料室

の間で語られていましたが、結果として、捨松が準備委員会として創設に尽力した学校に勤務していた梅子が推薦することで、アリスは日本に招聘されることになりました。梅子にとっても、アメリカで教師としての経験がある優秀なアリスが同僚になれば心強いし、大変嬉しいことでした。そうした経緯から、アリスは1887年に華族女学校に招聘され、1888年6月に来日しました。アリスと梅子は麴町紀尾井町にある公使の留守宅を借りて、半分は西洋式に、後の半分を日本式にして、シェアハウスを開始しました。

やがて梅子はアリスと深く語り合ううちに、第一級の教師になるためには再度アメリカに留学することが必要だと考えるようになりました。しかし、問題は費用でした。捨松とアリスの母校であるヴァッサー大学が候補に挙がりましたが、捨松の話によれば、ヴァッサー大学の授業料は高額で、学生たちも裕福な暮らしの者ばかりだということでした。政府からの奨学金も期待できない状況です。そんな中で、梅子は、自身をまるで本当の娘のように可愛がって育ててくれたアメリカにいるアデラインに、こんな手紙を送っています。

「今、経験している通り、生涯教師として生きていこうと思っています。通常の人生を歩むのなら十分な教育はすでに受けていると言えるかもしれませんが、私はもっと教育を受けたいのです。自分の仕事に十分に準備したいですし、日本には能力や力量を持った人々が必要なのです」

数年で良いからアメリカに行って教授法等についてさらに学びたい、という高い志をもった梅子の真摯な願いでした。また、これと同時に梅子は「節約すれば1か月に50ドルで学校に行くことができるだろうか」とアデラインに尋ねています。留学への想いを強める梅子は、アメリカ北東部の女子大学であるスミス、ウェルズリー、マウントホリヨークの大学カタログを送って欲しいとアデラインに依頼すると、有給での留学の許可を得るべく華族女学校と交渉を進めます。華族女学校での地位と給与が保証されるという条件は、留学にあたって勝ち得なければならない重要な事項でした。アリスも梅子のアメリカ留学計画に賛同し、大いに励ましてくれました。アリス自身も生涯を教師として過ごすことを決意していたので、梅子の教師としてのひたむきな想いに共感し、後押ししてくれたのです。



華族女学校の遺跡碑

千代田区永田町 参議院議長公邸東門前

そんな中、梅子がアーチャー・インスティテュートに在学中に出会ったことのあるメアリ・モリスという女性が、梅子の留学の希望について、クララ・ホイットニーを通じて知ることになります。クララは梅子が帰国してから出会ったアメリカ人の友人です。モリスは当時のプリンマー大学の学長ジェームズ・ローズをよく知っていたので、梅子のために掛け合ってくれました。そのおかげで、授業料と寮費が免除されるという破格の好条件のもと、梅子はプリンマー大学で学ぶことができるようになりました。

こうして、梅子の二度目のアメリカ留学は実現しました。一度目の留学はほとんど全て父・仙の力によるものでしたが、華族女学校との交渉に、アメリカ人からの支援の取りつけと、二度目の留学は梅子が自らの行動で手にした夢への切符でした。梅子はこの時、24歳でした。

参考文献:高橋裕子『津田梅子—女子教育を拓く』 岩波ジュニア新書 2022年 230頁

山崎孝子『津田梅子』 吉川弘文館 日本歴史学会編集 1988年 336頁